

IS

Jap. Doc. No. 705-A

Subject. ^(日語) 通商航海條約及議定書 ^(日語)

1896, (No. 297) 7.21.

Treaty of Navigation and Commerce between Japan and China

Defence Counsel. 大原 Phase 滿洲 and Protocol thereto of July 21, 1896

Certification. is attached to this.
~~will be lately completed.~~

Priority Express

(A) ~~Copy only~~ Copy only, The official trans attached
(The official translation is attached to this.)

~~(F) Translate and copy.~~
(Translation for reference is not attached to this.)

Date 3. Feb. 1947.

Sign J. H. C.

Doc. No. 705-A-B

Subject. ^(日語) 通商航海條約及議定書

1896 29. 10. 19

Defence Counsel. Ohara Phase Manchuria

Certification. is attached to this.
will be lately completed.

Priority Express

(A) ~~Copy only~~
(The official translation is attached to this.)

~~(F) Translate and copy.~~
(Translation for reference is not attached to this.)

Date J. H. C. Feb. 5. 1947

Sign J. H. C.

Note

Handwritten notes in Japanese characters, including '通商航海' and '議定書'.

D. D. H 792

2.

CERTIFICATE

Statement of Source and Authenticity .

I, HAYASHI, Kaoru, Chief of the Archives Section,
Japanese Foreign Office , hereby certify that
the document hereto attached in English
Japanese consisting
of ~~18~~^{17(E)} ~~7~~⁵ paged and entitled "Treaty of Navigation
and Commerce between Japan and China,
and Protocol thereof, July 21, 1896."

is an exact and true copy of an official document of the
Japanese Foreign Office.

Certified at Tokyo,

on this 30th day of January, 1946⁷.

K. Hayashi
Signature of Official

Witness : Nagahara Odo

日支間並支那内示日

通商航海條約及同上議定書

一八九六年七月二一日

光緒二十二年六月一一日

明治二十九年七月二一日

同 年九月二九日

同 年一〇月二〇日

同 年一〇月二八日

正文 英語、邦語及支語

前文

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ明治二十八年四月十七日即光緒二十二年三月二十三日下ノ關ニ於テ調印セラレタル條約第六條ノ規定ニ依リ通商航海條約ヲ締結スルコトニ決セリ因テ大日本國皇帝陛下ハ北京駐劄特命全權公使正四位勳一等男爵林董ヲ大清國皇帝陛下ハ欽差全權大臣總理各國事務大臣尙書銜戶部左侍郎張蔭桓ヲ各其ノ全權大臣ニ任命シタルヲ以テ兩國ノ全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議協定セリ

永久ノ平和親睦並ニ身體財產ノ保護

外交官ノ派駐

外交官ノ最惠國待遇

日本國領事官ノ派駐

第一條 大日本國皇帝陛下ト大清國皇帝陛下トノ間並ニ所

國臣民ノ間ニ永遠無窮ノ平和及親睦アルヘシ而シテ兩國臣民ハ各各兩締盟國ノ一方ニ於テ其ノ身體及財產ニ對シ等シク完全ナル保護ヲ享有スヘシ

第二條 大日本國皇帝陛下ハ便宜ニ從ヒ其ノ外交官ヲ清國北京ニ駐劄セシムルコトヲ得大清國皇帝陛下モ亦便宜ニ從

ヒ其ノ外交官ヲ日本國東京ニ駐劄セシムルコトヲ得

右駐劄外交官ハ各各國際公法ニ因リ之ニ附與スル一切ノ權利、特權及免除ヲ享有且總テ最惠國ノ同様ノ外交官ニ附與スル所ノ待遇ヲ受クルコトヲ得其ノ身體、家族、隨員、衙署、居館及往復書信ハ犯スヘカラサルモノトス右外交官ハ毫モ障礙セラルルコトヲク其ノ役員、使丁、通譯人、僕婢及從者ヲ隨意ニ選用スヘシ

第三條 大日本國皇帝陛下ハ外國通商ノ爲ニ現ニ開カレ若ハ將來開カラルヘキ清國ノ港市ノ内日本帝國ノ利害ニ必

日本國領事官ノ最
惠國待遇及其ノ權
限

清國領事館ノ派駐
及其ノ權限

日本國臣民清國各
港へ往來居住營業
ノ自由
地所家屋貸借ノ自
由並ニ最惠國待遇

要ナリト認ムル場所ニ總領事、領事、副領事及代辦領事
ヲ駐在セシムルコトヲ得

右領事官ハ清國官吏ヨリ相當ノ禮遇ヲ受ケ且最惠國ノ
領事官ニ現ニ附與シ若ハ將來附與スヘキ總テノ資格、
職權、裁判管轄權、特權及免除ヲ享有スヘキモノトス
大清國皇帝陛下モ亦同シク日本國內ニ於テ他國ノ領事
官カ現ニ駐在シ若ハ將來駐在スヘキ場所ニ總領事、領
事、副領事及代辦領事ヲ駐在セシムルコトヲ得而シテ
右領事官ハ日本國ニ在ル清國臣民及財產ニ對スル日本
帝國裁判所ノ裁判管轄權ニ屬スル事項ヲ除クノ外通常
領事官ニ附與スル權利及特典ヲ享有スヘシ

第四條 日本國臣民ハ其ノ家族、雇員及僕婢ト共ニ現ニ
外國人ノ居住貿易ノ爲開キ又ハ將來開クヘキ所ノ清國
ノ諸港諸市ニ往來シ住居シ商工業、製造業ヲ營ミ又ハ
其ノ他一切合法ノ職業ニ從事シ且其ノ商品及携帶品ヲ

日本國領事官
日本國領事官

清國立寄港へ日本
國船舶ノ寄港

密商ノ處分

國內地旅行

搭載シ前記諸開港地ノ間ヲ隨意ニ往來スヘク又其ノ地
ニ於テ外國人ノ使用及占有ノ爲既ニ選定シ若ハ將來選
定セラルヘキ地區内ニ於テ家屋ヲ賃借賣買シ地所ヲ賃
借シ寺院、墓所、病院ヲ建設スルコトヲ得但此等一切
ノ事項ニ付最惠國ノ臣民或ハ人民ニ現ニ附與シ若ハ將
來附與スヘキモノト同一ノ特權及免除ヲ享有スヘキモ
ノトス

第五條 日本國船舶ハ現ニ立寄港ナル安慶、大通、湖口、
武穴、陸溪口及吳淞並ニ將來立寄港トセラルヘキ總テ
ノ場所ニ於テ外國貿易ニ關スル現行章程ニ從ヒ旅客商
品ヲ積卸セシムル爲キ之ニ寄港スルコトヲ得清國ノ諸
開港及諸立寄港外ノ港ニ不法ニ進入シ若ハ沿海及河筋
ニ於テ密商ニ從事スル船舶ハ其ノ積荷ト共ニ清國政府
ニ於テ之ヲ沒收スヘキモノトス

第六條 日本國臣民ハ自國領事ヨリ下附シ地方官ノ副署

シタル旅券ヲ携帯スルトキハ游歴又ハ商用ノ爲メ清國內
地ノ各部ニ旅行スルコトヲ得而シテ該旅券ハ旅行地方
ニ於テ検査ヲ求メラレタルトキハ之ヲ示スヘキモノト
ス該旅券ニ不正ノ點ナキニ於テハ携帯者ハ進行ヲ許可
セラレ且其ノ旅行用ノ爲メ又ハ携帯品、商品運搬ノ爲
メ人夫、^畜馬、車輛、船隻ヲ雇入ルルニ故障アルヘカ
ラス若旅行者ニシテ旅券ヲ携帯セス又ハ法律ヲ犯スト
キハ之ヲ處分スル爲メ最寄ノ領事官ニ引渡スヘシ但シ
其ノ際唯必要ノ拘束ヲ加フルノミニシテ決シテ之ヲ處
待スヘカラス旅券ハ之ヲ發シタル日ヨリ 清曆十三箇月
間效力ヲ有スヘシ日本國臣民旅券ヲ携帯セスシテ内地
ニ旅行シタルトキハ三百兩ヲ超過セサル罰金ニ處スヘ
シ尤^モ日本國臣民ハ各開港地ヨリ一百清里以内ニハ五日
間ヲ限トシ旅券ヲ携帯セスシテ游歴スルコトヲ得但シ
本條ノ規定ハ之ヲ船舶乗組ノ水夫ニ適用スルコトヲ得

清國臣民履傭ノ自由

清國艇隻及運搬夫ノ履傭

輸出入ノ自由
清歐間税目税則ノ
適用並ニ輸出入ニ
關スル最惠國待遇

第七條 清國ノ開港地ニ住居ノ日本國臣民ハ清國臣民ヲ雇入レ總テ正當ノ業務ニ之ヲ使用スルコトヲ得相シ清國政府又ハ官吏ニ於テ之ヲ制限シ或ハ妨礙スルコトヲ得ス

第八條 日本國臣民ハ荷物又ハ旅客運搬ノ爲メ一切ノ艇隻ヲ賃借スルコトヲ得而シテ之カ爲メ拂フヘキ金額ハ貸借人相互ノ間ニ於テ之ヲ定メ清國政府又ハ官吏之ニ干涉スルコトヲ得ス艇數ニ對シ制限ヲ置クヘカラス又ハ右艇隻ニ關シ若ハ貨物運搬ニ從事スル人夫ニ關シ何人ニモ專業免許ヲ附與スルコトヲ得ス而シテ右艇隻ヲ以テ密商ニ從事スルモノハ法ニ照シ之ヲ處罰スヘシ

第九條 清國ト泰西諸國トノ間ニ實施スル税則ハ日本國臣民カ清國ヘ輸入シ若ハ日本國ヨリ清國ヘ輸入シ又ハ日本國臣民カ清國ヨリ輸入シ若ハ清國ヨリ日本國ヘ輸

開港場間ノ運搬税
等ノ免除

出スル一切ノ物品ニ適用スヘシ清國ト泰西諸國トノ間ニ
存在スル税目及税則ニ於テ特ニ輸入若ハ輸出ヲ制限シ若
ハ禁止セサル物品ハ規定ノ輸入税若ハ輸出税ヲ拂フノミ
ニテ自由ニ清國へ輸入シ若ハ清國ヨリ輸出スルコトヲ得
ヘシ但シ日本國臣民ハ何等ノ場合ニ於テモ最惠國臣民若
ハ人民カ清國ニ於テ現ニ納メ若ハ將來納ムヘキ輸出入税
ニ異ナルカ或ハ之ヨリ多額ノ納税ヲ要セラルルコトナカ
ルヘシ又日本國ヨリ清國へ輸入シ或ハ清國ヨリ日本國へ
輸出スル一切ノ物品ハ其ノ輸出入ニ際シ最惠國ヨリ輸入
シ或ハ之へ輸出スル同様ノ物品ニ對シ清國ニ於テ現ニ課
セラレ若ハ將來課セラルヘキモノト異ナルカ或ハ之ヨリ
多額ノ税ヲ課セラルルコトナカルヘシ

第十條 日本國臣民カ清國へ輸入シ或ハ日本國ヨリ清國へ
輸入シタル一切ノ物品ハ現行章程ニ從ヒ開港場ト開港場
ノ間ヲ運搬中其ノ所有者ノ國籍或ハ之ヲ運搬スル運具船

抵代税ノ納付
通過税ノ免除

船ノ國籍如何ニ拘ラス之ニ離シ全ク各種ノ税金、賦課金
手数料、養金等ヲ取立ツヘカラス

第十一條

日本國臣民ニシテ輸入物品ヲ清國內地ノ市場ニ
運搬セムト欲スルモノハ其ノ物品ノ有税品ナルトキハ
入税ノ二分ノ一、無税品ナルトキハ從價二分半ニ當ル抵
代税ヲ拂ヒ以テ其ノ物品ニ對スル一切ノ通過税ノ免除ヲ
受タルコト其ノ勝手タルヘシ而シテ右抵代税ヲ拂ヒタル
トキハ該物品ニ對シ一切ノ内地税ヲ免除スル爲證書ヲ發
附スヘキモノトス

第十二條

清國ニ在ル日本國臣民カ清國開港外ノ地ニ於テ
買入レタル一切ノ清國生産物及物品ニシテ輸出セラレム
トスルモノハ前條ニ記載シタル税率ニ依リ輸入税ノ代リ
ニ輸出税ヲ基礎トシテ算出シタル抵代税ヲ拂ヒタル上其
ノ輸出ニ際シ單ニ輸出税ヲ拂フ外ハ清國各地ニ於テ各種

輸出物品ニ對スル
抵代税ノ納付

輸出税ノ納付

貨物ノ再出

税金、賦課金、手数料、控戻金等ヲ免セラルヘシ但シ右
 へ前記ノ生産物及物品シテ通過税仕拂ノ日ヨリ十二箇月
 ノ期限内ニ現ニ外國ニ輸出セラレタル場合ニ限ル
 日本國臣民カ清國ノ開港地ニ於テ買入レタル一切ノ清國
 生産物及物品ニシテ海外輸出ヲ禁セラレタルモノハ輸出
 ノ際單ニ輸出税ヲ納ムル外ヘ一切ノ内地税、賦課金、手
 数料、控戻金等ヲ免除セラルヘシ且日本國臣民カ清國各地
 ニ於テ輸出ノ爲メ買入レタル一切ノ物品モ亦現行章程ニ
 從ヒ各開港間ニ運搬スルヲ得ルモノトス

第十三條 商品ニシテ其ノ出所外國ニ屬スルコト偶ナク且
 之ニ對シ己ニ輸入税ヲ完納シタルトキハ其ノ輸入ノ日ヨ
 リ三箇年内何時モ日本國臣民ニ於テ何等ノ輸出税ヲ納ム
 ルコトナクシテ之ヲ清國ヨリ何レノ外國ヘモ輸出スルヲ
 得又該再輸出者ハ己ニ右商品ニ對シテ納メラレタル輸入
 税額
 向テ清國稅關ヨリ税金拂戻證書ヲ受クヘシ但シ該商

官設倉庫ノ設置

噸税ノ賦課並ニ手
數料等ノ免除

品ハ原荷作ノ儘完全ニ保存セラレ異動ナキヲ要ス右拂戻
證書ハ其ノ所有者ノ望ニ因リ清國稅關官吏ニ於テ現金ヲ
以テ之ヲ償辨スルヲ得ヘキモノトス

第十四條

清國政府ハ其ノ諸開港地ニ於テ官設倉庫ヲ設ク
ルコトニ同意ス本件ハ關スル規則ハ追テ之ヲ設クヘシ

第十五條

日本國ノ商船ニシテ噸數百五十噸以上ノモノハ
清國ノ開港ニ入航スルニ當リ其ノ登記噸數壹噸ニ付清銀

四錢ノ額ヲ以テ噸税ヲ課セラルヘシ噸數百五十噸及其ノ

以下ノモノハ登記噸數壹噸ニ付壹錢ノ額トス然レトモ右

船舶ニシテ其ノ積荷ニ異動ナク入港後四十八時間以内ニ

出港スルモノハ噸税ヲ免除セラルヘシ

日本國ノ船舶並ニ噸税ヲ納メタル上ハ該税ヲ納メタル

港口出港ノ日ヨリ向テ四箇月間ハ清國ノ何レノ開港或ハ

立寄港ニ於テ噸税ヲ免除セラルヘシ但シ日本國ノ船舶

ハ清國ニ於テ現ニ修繕加ヘ居ル間ハ噸税ヲ納ムルヲ要セ

ス

清國ノ何レカ開港開ニ於テ旅客、手荷物、書札、無税品運搬ノ爲メ日本國臣民ノ使用スル小船及艇隻ハ噸税ヲ納ムルコトナカルヘシ尤モ其ノ運搬ノ時ニ當リ税金ヲ照セラルルニキ商品ヲ運搬スル所ノ小船及荷舟ハ總テ壹噸ニ付壹錢ノ制ヲ以テ四箇月毎ニ一回噸税ヲ納ムヘシ

日本國ノ船舶及艇隻ニ對シテハ噸税ノ外別ニ手数料或ハ賦金ヲ課スコトナカルヘシ但シ日本國ノ船舶及艇隻ハ最惠國ノ船舶及艇隻ノ噸税ニ異ナルカ又ハ之ヨリ多額ノ噸税ヲ納ムルコトナシト知ルヘシ

水先案内者ノ雇傭

第十六條 清國ノ開港ニ來航スル日本國ノ商船ハ其ノ入港ノ際隨意ニ水先案内者ヲ雇入ルルコトヲ得該商船總テ正當ノ諸税皆納ノ上出發セムトスル時ハ出港ノ際ニモ亦水先案内者ヲ使用スルコトヲ得

一 離船入港ノ自

第十七條 日本國ノ商船破損又ハ其ノ他ノ理由ヲ以テ避難所ヲ要スルノ止ムヲ得サルニ至リタルトキハ最寄ノ何レノ清

難破船ノ救助

國港口ニモ入港スルコトヲ得尤モ其ノ船舶ヲ修繕ヲ據タル
爲陸揚シタル物品ニ對シテハ諸稅若ハ噸稅ヲ拂フコトナカ
ルヘシ
但シ該物品ハ稅關吏ノ監督ニ屬スルモスト右等ノ船舶清
國沿岸ニ於テ淺瀬ニ乗揚ケ又ハ難破シタルトキハ清國官吏
ハ直ニ其ノ乗客及乗組員ヲ救助シ該船舶並ニ其ノ積荷ヲ安
全ナラシムルノ措置ヲ施スヘシ而シテ救助シタル人人ニハ
懸賞ノ待遇ヲ與ヘ必要ノ場合ニハ最寄ノ領事館マテ送届ク
ヘシ而シテ救助

難商ノ取締

清國ノ商船破損又ハ其ノ他ノ理由ヲ以テ最寄ノ日本港口ニ
避難所ヲ要スルノ止ムヲ得サルニ至リタルトキハ該船舶ハ
日本官吏ヨリ同一ノ待遇ヲ享有スヘシ
第十八條 諸開港地ニ於ケル清國官吏ハ詐偽又ハ密商ノ爲收
入ニ減少ヲ來ササル様其ノ必要ナリト認ムル措置ヲ施スヘ
シ

強盜海賊ノ逮捕處
罰

第十九條 日本國ノ船舶清國ノ強盜又ハ海賊ノ掠奪ニ遇フトキ
ハ該強盜海賊ヲ逮捕處罰シ其ノ贓品ヲ取戻シ之ヲ其ノ持主
ニ還付スルコトヲ務ムルハ清國官吏ノ職務タルヘシ

清國在留日本人ノ
裁判管轄權

第二十條 清國ニ在ル日本國臣民ノ身體、財産ニ關スル裁判
管轄權ハ當該日本國官吏ニ專屬ス日本國臣民或ハ一切ノ他
國臣民又ハ人民ヨリ日本國臣民竝ニ其ノ財産ニ係ル訴訟ハ
總テ清國官吏ノ干涉ヲ受クルコトナク右官吏ニ於テ審理判
決スヘシ

兩國臣民ニ交渉ス
ル民事裁判權

第二十一條 清國官吏又ハ臣民カ清國ニ在ル日本國臣民ニ對
シ又ハ其ノ財産ニ關シ民事訴訟ヲ起ストキハ日本國官吏ニ
於テ之ヲ審理判決スヘシ
○ 清國臣民ニ對シ又ハ其ノ財産ニ關シ清國ニ在ル日本國官吏
或ハ臣民ヨリ起ス所ノ民事訴訟ハ總テ清國官吏ニ於テ之ヲ
審理判決スヘシ

兩國臣民ニ交渉ス

第二十二條 清國ニ於テ犯罪ノ被告トナリタル日本國ノ法律

刑罰裁判權

ニ依リ日本國官吏之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メタルトキハ之
ヲ處罪スヘシ

清國ニ在ル日本國臣民ニ對シ犯罪ノ被告トナリタル清國臣
民ハ清國ノ法律ニ依リ清國官吏之ヲ審理シ其ノ有罪ト認メ
タルトキハ之ヲ處罰スヘシ

債務者ノ措辦

第二十三條

清國臣民カ日本國臣民ニ對シテ負債ヲ償辦セヌ
又ハ詐偽逃亡スルトキハ清國官吏之ヲ逮捕シ其ノ負債ヲ償
辦セシムルコトヲ務ムヘシ日本國官吏ニ於テモ日本國臣民
カ清國臣民ニ對シテ詐偽逃亡シ又ハ其ノ負債ヲ償辦セサル
モノハ處分スルコトヲ務ムヘシ

犯罪者等ノ引渡

第二十四條

清國ニ在ル日本人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償
辦セヌシテ詐偽逃亡シタル者清國ノ内地ニ通レ清國臣民ノ
住居若ハ清國船舶中ニ潛伏スルトキハ清國官吏ハ日本國領
事ヨリ請求次第日本國官吏ニ之ヲ引渡スヘシ
又清國ニ在ル清國人ニシテ罪ヲ犯シ又ハ負債ヲ償辦セヌシ

現行條約上ノ我特
權等ノ保護並ニ最
惠國待遇

條約ノ改修及有效
期間

ヲ詐偽逃亡シタル者清國ニ在ル日本國臣民ノ住居若ハ清國
領海ニ於ケル日本國船舶中ニ潛伏スルトキハ清國官吏ヨリ

日本國官吏ヘ請求次第之ヲ引渡スヘシ

第二十五條 日本國ノ政府及臣民ハ其ノ現在效力ヲ有スル日
清國條約諸條款ニ據リ得タル一切ノ特權免除及利益ヲ享有
スルコトヲ更ニ茲ニ確定ス

且日本國ノ政府及臣民ハ大清國皇帝陛下ヨリ他國ノ政府又
ハ臣民ニ現ニ附與シ又ハ將來スヘキ一切ノ特權、免除及利
益ヲ享有スヘキコトヲ特ニ茲ニ規定ス

第二十六條 締盟國ノ一方ハ本條約批准交換ノ日ヨリ十箇年
ノ終ニ於テ税目及本條約ノ通商ニ關スル條款ノ改正ヲ要求
スルコトヲ得續レトモ若最初十箇年ノ終ヨリ起算シ六箇月
以内ニ兩締盟國ノ何レヨリモ右要求ヲ爲サズ改正ヲ行ハザ
ルトキハ本條約並税目ハ前十箇年ノ終ヨリ起算シ更ニ十箇
年間其ノ僅效力ヲ有スヘシ而シテ其ノ後各十箇年ノ終ニ於

通渡規定

ケルモ亦同様タルヘシ
第二十七條 締盟國ハ本條約ノ效力ヲ完全ナラシムルニ必要ナル章程ヲ協議決定スヘシ尤右章程ノ實施セララルニ至ル迄ハ現ニ清國ト泰西諸國トノ間ニ存スル取極及章程ニシテ其ノ本條約ノ規定ニ矛盾セズシテ適用セラレ得ル限ハ締盟國ニ於テ之ヲ遵守スヘキモノトス

本

文

第二十八條 本條約ハ日本文、漢文及英文ニ開印スヘシ然レトモ將來議論ヲ防ク爲メ締盟國ノ全權大臣ハ日本文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニシタルトキハ其ノ異ナル點ハ英文本文ニ依テ之ヲ決裁スヘキコトヲ協議決定セリ

批

准

第二十九條 本條約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ之ヲ批准セララルヘク而シテ其ノ批准書ハ本條約開印ノ日ヨリ三箇月以内ニ可成速ニ北京ニ於テ之ヲ交換スヘシ

右證據トシテ兩國ノ全權大臣本條約ニ記名開印スルモノナリ

明治二十九年七月二十一日即光緒二十二年六月十一日北京ニ於テ作ル

大日本帝國北京駐劄特命全權公使正四位勳一等 男爵 林 董 (記名) 印

大清帝國欽差全權大臣總理各國事務大臣尙書 翁 同龢 (記名) 印

翁同龢

張蔭桓 (記名) 印

議定書

二十九年十月十九日北京ニ於テ調印（日、キキ）
年十一月十日官報掲載

新開港場ニ日本專
有居留地ノ設定

大日本、特命全權公使正四位勳一等男爵林董ハ大清國欽命總
理事務王大臣ト左ノ四箇條ヲ議定ス

第一條 新開通商市港場ニ日本專有ノ居留地ヲ置クコトヲ安
定シ道路管轄及地方警察ノ權ハ日本領事ニ專屬スルモノト

長江章程ノ適用

第二條 光緒二十二年八月初三日上海稅關ヨリ發布セシ洋商
蘇杭滬三處通商試辦章程内其ノ汽船及備入又ハ所有ノ船隻

ニ關スル事ハ日本國ト妥商シテ定ムヘシ之ヲ商定スル迄ハ
適用シ得ヘキ限ハ長江章程ヲ施行スルモノトス

日本國臣民ノ製造
品ニ對スル課稅

第三條 日本國政府ハ清國政府カ清國ニ於テ日本國臣民ノ製
造セル物品ニ對シ便宜酌量シテ課稅ヲナスコトヲ允スヘシ
但シ其ノ稅ハ清國臣民カ納ムヘキ稅ニ異ナルカ或ハ之ヨリ

上海外三處ニ帶國
專有居留地ノ設定

多額ナルコトヲ得ス

清國政府ハ日本國政府ヨリ請求ノ上ハ早速上海、天津、厦
門、漢口等處ニ日本專有ノ居留地ヲ設クルコトヲ允スヘシ
第四條 條約ニ依リ凡テ日本國軍隊占領地ノ經界線ヲ距ルコ
ト日本里數五里此ノ清國里數大約四十里ノ地内ニハ清國軍
隊ノ之ニ近ツキ若ハ之ヲ占領スルヲ許スヘカラサルコトヲ
山東運漕ニ電達スヘシ
右日本文及漢文各二通ヲ作り對照シテ記名關印シ雙方其ノ各
一通ヲ執テ證據トス

明治二十九年十月十九日

光緒二十二年九月十三日

張榮教林

陸

桓壽信董